

犬養道子との関係に見る晩年の犬養木堂 — 道子の証言を中心として — (Ⅱ)

時任 英人

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2014年10月1日 受理)

4 総裁就任後の木堂と道子

総裁に就任したのちも木堂は、道子とのふれあいを大事にしたようである。たとえば、「ちび」という名の犬を道子は可愛がっていたが、1931（昭和6）年12月に木堂が首相に就任する直前、その「ちび」のお腹が大きくなっているのに驚いた道子は、そのことを木堂に報告した。すると木堂は「おおそうか」と言って、「ちび」を見に来て、「なに、へんではない、仔を産むぞ」と言ったが、その翌日、心配した道子が急いで帰ると木堂が首相に就任したことを聞くことになった。

その夜道子の父親の健（木堂の秘書）と木堂が、閣僚の人選をしていた最中であつたが、道子は「ちび」のことと周りの喧騒でなかなか眠れないため台所に行くと、閣僚就任で呼ばれた鳩山一郎（文部大臣）や高橋是清（大蔵大臣）らに出会うことになる。しかし、母親がいないことがわかった道子は、閣僚の人選をしていた木堂の書齋に上がって行くと、木堂は「おお道公か、ちびはどうだ、お祖父ちゃんの方はすんだから、こんどはチビだな」と言った[註42]。

これ以降も木堂は道子にいろいろな配慮をしている。たとえば形見分けがその一例である。首相に就任した翌月の1932年1月に木堂は耳鼻科の医師が検診を終えた直後、3月に行われる女子学院の卒業を控えた道子を、自室に呼び入れている。木堂は「なあ道公」と話しかけ「卒業はひとつけじめになるでな、ええ機会と想着て・・・道公に記念をのこしたい」と切り出した。これを聞いた母親がいざりでると木堂はこれを制し、一つずつ説明をはじめた。まず木箱を開けて小豆色をした、中国広東省の有名な端溪硯を出し「孫文の葬式〔正確には葬式ではなく、1929年に行われた孫文の墓の移棺式のこと〕に行った折お祖父ちゃんが見つけた硯で・・・わるいものではない」と述べたのち、端溪に関する説明をし「小学生にはまだ過ぎるかと思うが」とも述べた。道子は、この発言を聞き「もう時がないと言いたかったのであろう」[註43]と推測している。

つづけて木堂は、もう一つの箱から端溪の「眼」をそのままに使う、花の枝に止まる「小鳥の眼とし、花びらの凹を筆の水場に彫った優に美しい一品」も渡した。そして、今度は木堂の旧友で木堂が使用する硯の表装、硯箱を手掛けた人物の手による一本の軸を出し、これには道子のために内閣総理大臣に就任する2か月前に書いた「訓戒」が記してあつ

た[註 44]。

恕

吾十四歳にして父を喪ひしより
 困苦の中に修学し成長し
 既にして世ニ出て政事ニ関係せし
 より長らく逆境ニ居り世の寒苦
 辛酸を嘗め尽くしたるが故に貧
 民ニ対する毎に若し吾身此境遇
 に在らはと思ひやるが故に未だ曾て僕
 婢などを叱罵したることあらず 吾子
 孫も亦此心を以て人ニ接せんことを
 望む 此心が即ち恕なり
 昭和六年十月書して女孫
 道子に付す 木堂

道子は、この木堂の言葉を次のように書き下している[註 45]。

・・・自分は十四歳で父を亡くしてから貧窮困苦のうちに成長した、世の辛酸と人の心のうつりかわりを知って人となった、だから他人に対してもあのころの自分の境遇にあるならばと思いやらずにいられぬ。使用人を叱罵したことの無いのはそのためである。恕せ。思いやれ。恕の心を忘れるな。女孫道子にのこしたい訓はこれである、と。

木堂らしい言葉である。このような木堂の優しさについては健も指摘しているが、これが木堂の強みであると同時に弱点でもあった。しかし、このような性格に感動してついていく者が多かったであろう。むろん、道子が木堂に懐いたのもこのような木堂の性格にもあった。

木堂は、これでも気が済まなかったようである。今度は道子に、卒業式に着ていく反物を贈った。つづいて木堂は、蓄膿の治療を受けたときに使った布団の枕もとの小机の引き出しから「一包みの紙」を取り出した。道子によると、この引き出しの奥には総理大臣を拜命した夜に清書した遺書が入っていた。

木堂が取り出したのは、友人の中国人から送られた紙だが、ただの紙ではなく、「乾隆^{けんりゅう}の帝^{みかど}〔清の高宗朝の帝〕の御紙^{ぎよし}じゃ」と説明したのち、「道公にのこす。大切にせいよ」と言った。このとき道子の母の眼には涙があった。この紙は木堂が息を引き取ったとき

の「台光院殿沈毅木堂大居士」の位牌を安置することになった仏壇の内装に使われた[註46]。

ここまで木堂の配慮に接した道子と母の仲子は、淡々と形見を渡しつづける姿勢に表現しがたい思いをもったことであろうし、木堂の覚悟が如何ほどであったかについても、感じる事ができたであろう。

ところで、子供の頃から優れた観察眼をもった道子であればこそ、犬養に関する批評は、的確である。たとえば、「お祖父ちゃまという人は、時間と労力の無駄の大きらいな人であった」[註47]という批評である。これは、犬養が誤解された点でもあったが。政治家になって以来犬養は、政策の先が見えるので実現できないと考えると、陳情者たちの言うことを、あまり聞かなかったということがあった。

したがって、犬養は、冷たいと言われることになるが、そうではなく、実現できない政策について期待をもたれても困るという想いがあったのであろう。道子は、このことを木堂が首相官邸に入ってから気づいたようである。最も年齢からみると、当然ではあるが。

道子が気付いたことというのは、木堂が四ツ谷の家から首相官邸に通うのは、時間の無駄だから、最初から官邸で生活をした方が良いということになったときである。また、このような感覚と鋭さについては、木堂の妻の千代もそうだったようで、首相官邸に突然の死が襲ったときのために、全員の「喪服」を長持ちに入れて、永田町に持ち込んだらしい。まるで千代も木堂が首相在任中に「政治的死」を迎えることになるかもしれないということに察していたような行動である[註48]。さすが木堂の伴侶ということであろう。

また、道子は木堂について、他の人では目撃できないことを証言している。たとえば、襟に議員バッヂをつけたままで、官邸の榎の木の下で木堂が、国会の議場で見せるように、軽くこぶしを握った左手を背に回し、右手を自然に前方に流した姿勢で、佇んでいた。しかし、たった一つ演壇上と違ったのは、生来の猫背を少しだけそらせていたことで、澁刺と張った梢を見ていたようである。また、道子が官邸で木堂に会いたいときに、探し当てると木堂は、いつも榎の木の下にいた。そして、道子が枯れた芝生の上を音を立てながら近づいても振り向きもせず、「安らいだというよりは何か心奪われた風に、梢を仰ぎつつ梢を見ていないようでもあった」ということである。

そこで道子が、「お祖父ちゃま、何見てる」と言うと、「おお」とわれに返って「道公・・・寒いのが」と言ったらしいが、そのとき木堂は襟巻もつけず、外套も手袋もつけていなかった。それで道子は、そのときの木堂が「疲れ果てた表情」をしているのに「一驚」した。というのは、木堂は日頃から疲れたとは言わない人だと思っていたので、その顔が「焦慮



図4 1931年頃

のまじった疲労の顔」をしていたことに驚いたからである。そうした「疲れ果てた表情」が次第に「憂い」に変化していったので、道子は「情の限りをこめて木堂の骨張った手を取」り、「お祖父ちゃま、どうしたの、疲れたの」と尋ねると、木堂は、その中央の黒い部分をいつも鋭く光らせていた大きな瞳で、愛情をもって道子を見つめた。そのときの木堂の瞳は「いつもの冴えを失っている」と道子は感じた[註 49]。

この頃木堂は、日本という国家のその後の進路を決定づける満州事変の解決と格闘していたため、その疲れも当然だったと思われる。恐慌対策は高橋是清に任せ、軍部とたった1人で闘おうとしていたのである。

ほかにも道子は、今日から判断すると、いくつかの歴史的イベントや木堂の心境も目撃することになる。

第一は、1932年1月28日に勃発した上海事変直後に、首相官邸の閣議室で会議が開催されたときのことである。このときのことは、道子の父親も証言している[註 50]。たまたま道子が閣議室を開けたところ、荒木貞夫陸軍大臣が興奮して、上海で「支那軍の大抵抗に遭っている皇軍」を援助するため「一大軍隊を送り支那



図5 1932年頃

を一挙にこらしめるべき」と発言すると、木堂は「この馬鹿に答える気にもならず黙って」と、高橋是清大蔵大臣が「君はまだ若い・・・波がひとつ来ただけで大変だ大変だと言う・・・支那の身になってみる、満州がカッサらわれて・・・まずカッサらった満州を返すことが先決だよ。支那問題はここにおられる総理のナワ張り」ゆえ口出しするなと止めをさした、ということであるが、そのとき「陸軍大臣は窮し、蒼白となり、陸軍省に帰って憤懣をぶちまけた」[註 51]ということである。

木堂の想いには、相当のものがあつたと言える。というのは、木堂が政友会の総裁を引き受け、内閣を担当した動機と自身の健康について道子は、次のように指摘している[註 52]。

お祖父ちゃまは一日でも長く生きようとしていた。一日でも永らえれば一日長く軍を抑えることも出来ようかと。彼は目立ってからだを厭うようになっていた。持病〔の〕蓄膿症は毎日大野耳鼻医師に來診を乞うことによって癒そうとした。蓄膿は「思考力を弱めるから」である。酒は断ち、塩分を避けた。

天命の日の訪れるまで、己のからだはすでに己のものではないと感じているようであった。

ようするに陸軍を抑えて満州事変を終結させたかったのである。しかしたとえ首相とは言え、単独でそのことができると思ったのであろうか。当初、犬養は1人でやるつもりではなかった。元老の西園寺公望や最後は天皇の力を利用して対処しようとしていた。

しかし、このことに気付いた西園寺は次第に犬養と距離を置きはじめた。政界の風潮からして、そのようなことに手を貸せば天皇や自分にたいする攻撃を招くことになる事態を恐れたからである[註 53]。

この意味で当初から犬養が目論んでいた計画は、ほとんど実現が不可能なことであった。

第二は、1932年5月13日、事件の2日前の木堂の心境である。道子によると、木堂はこの日官邸の庭の土にしゃがみこんで、「生」に関する考えを述べたということである。「土に托し、花のすんだあとの坊主になったバラの実に托し。この坊主は地に落ちる、というようなこと」を「楽しみながら」述べた。そして「落ちるとそこから芽が出る・・・逆に言うと、落ちなければ生命は続かないのだ、と。待ってれ、と言ってお祖父ちゃんは野ばらの坊主を一つ呉れた」。道子がそれをセーラー服のポケットにしまい込むと、次のようにつづけた[註 54]。

「道公、勉強は何が好きかな」

「絵と作文」

「それはわかるとる」と彼は言った。勉強せいとはしかし言わず、背を丸めしゃがみこんで草とりをつづけた。時々顔をあげて、この草はどういう性質だとか、あそこに生えている木は何の木で日本のどのへんに多いとか。自然をよう見ろ、とか。・・・何ともいえずのどかで嬉しく、・・・私は快活になり、ふざけてからみつき笑い声をたて、いつまでも甘えた。

楽しい一刻は、あの櫃の根もとで終わった。畑からそこまで手をつないで行ったお祖父ちゃんがこう言ったからである。「もうお帰り。お祖父ちゃんは少し考えごとがあるでな」そして梢を仰いだ。

それが——別れとなった・・・

まるで自分が死んだときどうなるか、またそもそも生きとし生けるものはどうなるのか、ということをお話しているかのようである。この含みは自分に押し寄せようとする時代の圧力を了解していたような内容である。

5 五・一五事件に遭遇して

1932年5月15日。家族はどうしたであろうか。道子の母親は、弟の康彦の手を引いて日本間にいたお手伝いに指図をして、夕食の前に食堂でお茶でもと考え、犬養を呼びに行くと、犬養は書きかけの書状をおいて、道子の母親に従って食堂に向かった。そのとき道

子の母親は、異様に乱れた足音と物のはじけるような「ふしぎな音」（これは田中巡査が撃たれた音）を耳にして、立ち止まったとき、護衛の1人の村田巡査が走り込んできて、「暴漢です、お逃げください！ お逃げください」と叫んだ。道子の母は日本間の「地理」を考え、ここは逃げられないと考え、「おとうさま、庭！」と述べ、自分の身で木堂を救おうと一瞬考えたようだった[註55]。

「いいや、逃げぬ」

お祖父ちゃまはずかしく言った。いつもの調子であった。ああへたに逃がして見つかってひきずられでもしたら——お祖父ちゃまは、それを好まぬ、と母は感じて言葉を失った。が、そう感じるにも感じないにも、時はすでにおそかった。お祖父ちゃまは嫁である母と孫である子をかばう形をとった。

「逃げない、会おう」

言葉の終りやらぬうち、海軍少尉の服をつけた二人と陸軍士官候補生姿の三人が土足のまま、方々に尽き当たりつつ疾風の勢いであらわれた。お祖父ちゃまを見ると矢庭にひとりが拳銃を突き出し引金をひいたが弾丸は出なかった。

「まあ、急くな」

お祖父ちゃまはゆっくりと、議会の野次を押さえるときと同じしぐさで手を振った。

「撃つのはいつでも撃てる。あっちへ行って話を聞こう・・・ついて来い」背を丸めて先に立ってひょこひょここと歩きはじめた。四人の若者は一瞬気を呑まれた風におとなしくあとにつづいた。

こうした状況の中で、32歳の母親は、動じず、冷静に一切を理解した。暴漢が最後の弾丸を発射したのち走り去ると、母親は反射的に、恐怖でひきつっている康彦をそこに置き、事件が起こった日本間に駆け寄り、日頃記憶していた外科病院や内科病院の電話番号を確認し、容態によって報告すべき文句を考えていた。

撃たれた犬養が「いまの若いモン、話して聞かせることがある」と述べたのちに、母親に向って「怪我はなかったか、仲さん」と言ったのを聞くと、母親はこのとき木堂が即死でなかったのを確認し、医者^の娘らしく弾丸の入り口と、推定弾丸数を数え血止めを縛るより早く、震えもせずに電話ボックスに走り、暗記していた青山外科以下、数人の医師に次々と電話をかけた。

気丈な母親である。常人には、なかなかできないと思われるが、やはり、歴史の局面に立ち会う運命の人とはたとえ女性であろうと、こういうものだろうかと思わせる。

木堂の妻の千代も、「慌てもせず大声も出さずしゃんと」していた。道子は、今度は芳沢謙吉外務大臣[註56]の妻の操（犬養の長女）の気丈さを目撃する。事件直後に、豊廊下

を踏んでくる閣僚の中に荒木陸軍大臣を見つけた操は、「ついと立つと鼻突き合わせた形で大臣を阻み低いがつよい声で『荒木さん、あなたがやった!』と迫った。するととたんに正装の大臣が崩れ折れて畳廊下に両手を突き、長い間背中を震わせていた」[註 57]ということである。さすがに犬養の娘だけのことはある。

では、道子はその日どう過ごしていたのであろうか。

晴れて爽快な日曜日、道子が、弟たちと庭にいと日頃からバター臭いという理由で洋食を作らせなかった木堂の妻の千代が留守のため、母親が木堂のために洋食の出前を取る前に、試食に行くということを言ってきた（これは議会開催が近づいたので、健が木堂のために注文していたものらしいが）。すると木堂は「ほうそりゃ有難い、祖母さんちよいちょいひとりで宴会に行ってくれんかな」と言って喜んだということである。実は木堂は、シチューやバターのついたパン、それに油いためものが好きだったのだが、千代が嫌ったため容易に口にできなかつたからである。

その後フランス料理店で母親が木堂のための注文をしたのち、総理官邸に戻る途中で道子は、当時外務大臣の官舎（旧有栖川宮邸）の所で車を降り、芳沢外務大臣の子供たちとテニスをすることにした。

すると母親は自分と康彦は木堂の所に先に行くので、5時半には来るようにと言った。芳沢は犬養内閣の外務大臣に就任するまでフランスに勤務していたため、その嫁である叔母の操の持物には道子にとって興味深いものが数多くあった。子供の好奇心をくすぐるものを見たり、味わったりすることができるので、木堂の総理官邸より外相官舎の方が興味深かった。

年齢の近いいとこたちと遊んでいるうちに、5時になった。

一方官邸に戻った母親は、少し早い時間ではあったが、食事の前にお茶を出そうとして木堂を誘うと、書きかけの書状を中止して喜んで来た。そこに暴漢が侵入してきたのである。

木堂に起こった事態を聞いた道子は、子供心にもそれ以前から何らかの予感があったため「やっぱり、やっぱり」という想いでいっぱいだった。それから外相公用車に乗って総理官邸に着いたが、正門から入れないと分かったと裏道で降り、いとこたちの先頭に立って、裏門から内玄関を通ると、最初に撃たれた田中巡査が倒れており、蹴破られた杉戸に血痕が飛び散り、滴っていたのを目撃した。

木堂は襖が大きく開かれた日本間の縁側の近くで、頭から首にかけて包帯を巻かれて横たえられていた。このとき毅然として看病していた母親が、「『大丈夫です!』」と言ったのを聞くと道子は、こうした重大なときに傍にいなかったのを悔いて声をあげて泣きじゃくった。途中で木堂が命をとりとめたと聞くと道子は、急に饒舌になり、いとこたちとはしゃいだ。父親の健も木堂が軽傷だと感じた。道子は安心して母方の身内の待つ秘書官邸に帰ったが、その夜10時過ぎになると、誰かが玄関で道子の名前を呼び「早く、早く!」

とせきたてた。

急いで木堂の部屋に駆けつけると、横たえられた木堂の枕もとのスタンド以外の電灯はすべて消されていた。「黄ばんだ丸い小さな光の環の中で」、包帯につつまれた木堂が口を少し開けていた。まるでこのときを予想して心の準備をしていたかのように苦痛のかげはなく、顔は「いつものように——いや、いつもよりはるかに柔和に見えた。呼吸は間遠であり弱かった」。木堂を家族が取り囲み、その外側に医師団がおり、その背後に高橋蔵相、鳩山文相、鈴木喜三郎法相、中橋徳五郎内相らがいた[註 58]。

「あんなに可愛がって頂いたんだ、お別れをおし。お礼をお言い」

父の涙でかすれた声が耳のそばで、しかしひどく遠くから響いた。涙が突然、私ののどもとに押し上げ、耳はじいんと鳴りはじめた。震えつつ私は手を伸ばし、驚いたことに異常なこわばりを感じさせるお祖父ちゃまの頬を撫でさすった。撫でつつ呼んだ「お祖父ちゃま！」呼びつつむせんだ。むせびつつさすった。さするたびにその頬は冷えてゆくようであった。

道子は僅か 10 歳で、もっとも大好きな人物がこの世を去る瞬間に立ち会ったのである。これは宿命であった。というのは、明治・大正・昭和の三代の政界でほとんどの期間にわたって野党勢力であったとはいえ縦横無尽に活動し、その政治的生涯の最晩年に日本国の首相として指揮をとり、最後に時代を象徴するテロに遭遇した政治家犬養毅の孫として生まれ、その最期にも立ち会ったのだから。

その後木堂は、カンフル注射をされたが、午後 11 時 26 分帰らざる人となったのである。道子はどうしても木堂の傍を離れないと言い張って「泣きわめいたので」大臣たちが遺骸を見舞う横に寝かされていた。その前から意識を亡くしたが、目が覚めると鼻血をだしつつ、線香の臭いのする部屋で木堂の白無垢の床の横に寝かされていたのに気付いた。

朝方 4 時ごろ突然、道子は、魂というものが亡くなった人の温もりが消える直前に抜け出して「天に昇」るが、それは親しかった人には見えるものだと言われたことを思い出したため、周りの人たちの制止を聞かず、白布を取り除いて布団をめくって、木堂の「頬から足まで触れて見た。ぬくみはかすかであった」。

6 木堂との別れ

これからの道子は、政治家の最後に立ち会う者としては、あまりに印象深い行動をした。最初に引用した健の印象よりさらに生々しい印象が綴られている[註 59]。

「もう間に合わないかもしれない・・・」

「いや間に合う、お祖父ちゃまは道ちゃんになら別れを告げて下さる・・・」

まろぶごとく私は庭に走り出た。まっすぐにあの榎の根もとに。涙はもはや涸れ、(鼻血はまだ吹き出していたが) 仰げば、澄んだ暁の空に星が無数にきらめいているのが見えた。待っても待っても、しかしお祖父ちゃまの魂は見えなかった。ただ星だけがまたたいて、しんかんと庭は冷え黙した。

ふと。芝生を踏む音がした。父だった。

わずか数時間のうちに、別人のようにやつれはてた彼は、しほり出す声で言った。「道ちゃん、ここにいたのか」

それから彼は腕を伸ばし、わが娘というよりは友人に対する態度で、私の肩を大きくつかむと、そのままじっと私の眼に見入った。私もまた彼の眼をじっと見た。ゆっくりと二人の眼に大粒の涙が溢れ、流れおち、やがてそれは水の糸となり、号泣と変わった。そして二人はいつのまにか、しかと抱き合っていた。

「パパ、パパ、道ちゃんがいるよ、ここにいるよ」

私は一度、そう口走って彼の頭をこの上なく哀れなものに、この上なくいとしいものに、撫でさすった。

泣く力も流す涙ももはや絶えたとき、父と私は榎の根元にくずれるようにしゃがみこみ、言いあわせたごとくに互いの頬を互いの指で拭きながら、空を見上げた。

木堂に心から愛された者として道子は突然の死去に力いっぱい別れを告げた。

一方父親の健は優しく扱われなかった実母が、少年の頃は結果的に家から出ていくことを容認した者として木堂を敬遠していたが、成長するにつれ木堂の心境を次第に理解しようとした。そして最晩年は全力で父親を支えようとして作家としての人生を放擲し、まるでひたすら反省を込めるかのように木堂に仕え、自分の成長過程での不義理を言葉で詫げる代わりに、思いやりのある態度を捧げはじめたばかりなので、辛かったのであろう。まだこれから支えて心からの愛情と信頼を示したかったのに、という想いがあったのではあるまいか。この文章を読むと2人の木堂にたいする愛情の深さを見る思いがする。

道子の弟の康彦は、当時4歳で、何も記憶していないらしいが、いろいろな人たちから聞いたり、出版物からの情報として、次のように証言している[註60]。

木堂さんが将校や士官候補生たちの先に立って廊下を歩き始めた時、私の母は私を抱いたままついて行こうとしたようですが、「ついて来てはいかん」と将校の一人、これはどうも黒岩少尉のようではありますが、その将校に押し止められた。抱いていた私のお尻にピストルが押し付けられたのだそうで、その話は私が小学生になった頃から何度も聞かされたものであります。

では、事件当日の健はどうであったろうか。

木堂が絶命したのちの道子とのことは先述したが、その日健は朝から一度も木堂には会わなかった。この数日前から木堂の傍を少時間でも離れるのが「どうも不本意」であったが、せめて子供たちを木堂の傍において「愉快にさせたい」と考えていた。まるで木堂の最期を予感して心が疼いていたかのようなのである。出がけに門のあたりで、仲子と三輪車に乗った康彦に出会ったので、表現しがたい「満足」を感じつつ、「お祖父さんの相手をしてくれ」と言いつけると、銀座裏の「Aワン」というレストランで木堂の夕食のためにすでに予約しておいたスープと魚料理を受け取りに出かけた。

健は神田区府会議員候補者の会合を終えて、Aワンのスープと魚料理を受取り、紀伊国屋で本を立ち読みしたのち、夕食に間に合うように総理官邸に向かわせた専用車が、また戻ってきて事件の発生を知らせた[註 61]。

私は妙に落ち着いてしまつて——恐らくそれは感情の激動の変形であつたらうと思ふが——ひどくゆつくり靴を履いた。そして第一に、「やつぱり結論が来たな」と思った。しかし、凶変が街頭でなく、演説会場でもなく、何故このやうな長閑な夕暮に自宅で起つたのだらうと、まことに気の抜けたやうな風でボンヤリと不審を起した。自動車の中で私は「傷はどうだ」と人に問うた。「むづかしいでせう」と云ふのが答えであつた。私はしばらく黙つた。自動車が速力を増してゐるなど考へた。そして、外務省の裏通を非常な勢いで抜けて行く時に、「俺がお供をしなければならなかつたのに」と独言した。勿論一所に撃たれなかつたのを残念がる意味である。まことに恥しい陳腐なセリフを口走つたやうではあるが、不用意にして陳腐な言葉のうちに、有る限りの真情を籠めて思はずつぶやいたといふが、妥当な批判なのであらう。この独言が、あまりに自然に、そしてあまりに愛情より溢れて出たのに自ら気が付くと、私は一種霞に包まれたやうな、広大無辺の悲しみをボンヤリ感じた。正直に云ふが、父の臨終以前に於て單純に悲哀の感情を味つたのはこの瞬間だけであつた。

予想していたとは言え、実際「愛する」木堂がテロに合い、しかも絶命するかもしれなると聞くと、あっけないほど冷静でいられた。しかし、これは木堂を見る直前だったからである。

官邸に着くと横たえられている木堂の容態を医師から説明され、「脈もたしかであるし、今は輸血の必要もない」と言われ、父親に近づき「お父さん、どうしました。健ですよ」と声をかけると、父親は大きく眼を開いたが、「その眼の開き方で私はいかに父に愛されてゐるかを今更のやうに深く感じた」。このとき健のなかでは自分にたいする木堂の「愛情」を確認したかった。そして木堂が銃が撃ち込まれた場所を説明するのを聞いて「すっかり安堵」した。また木堂は、「あんなに可愛がつた道子などもとりたて、枕頭によぶで

もなし、何か仕事をいひつけるにもわざ／＼私を呼ばず平生の事務の慣習通りに女中にいひつけて」いたことも、健を安心させたのである[註 62]。

その後も健は、木堂に「頭痛と吐き気の有無」を尋ねたが、即座に否定された。医師は、その後郷里の岡山県に在住している木堂の自家の当主から輸血をした[註 63]。

一時的に小康状態を経たのち9時を過ぎて突然変化し、深呼吸が苦しげになり、意識が朦朧としてきた。酸素吸入が行われたのち、多量の吐血をし、少し楽になったようだった。少しずつ鼻からの出血が続いたようなので健は、医師に鼻血止めの処置を依頼すると、その出血の原因が鼻血ではなく、弾丸が届いた脳からのものだと説明されると「生来この瞬間のごとくに従順な人間になつた事はないやうに感じた」[註 64]ということである。

木堂の妻の千代は主治医に食堂の方に連れて行かれた。容態の宣告を受けるのだと分かると健は、「この間が・・・苦痛であった」が千代が「立派な態度で取り乱さず戻り、落ち着いて木堂の傍に来ると、「ホツと」した。

ここで仲子は道子を呼びよせるかどうかを尋ねると、健が「まだ早い」と否定したため、この言葉で仲子も事態の行き先を理解したようだったという。それから1時間が過ぎると、木堂が「全く昏睡し、口を少し開いて、微かに呼吸していた」表情を見た健は、木堂が政友会の総裁に就任したのと同年に亡くなった木堂の妹すゑの容貌に似てきたことを感じた。むろん兄妹ゆえ似ていても不思議はないのだが、それまでの木堂が政治闘争に打ち込んできたため、「その気魄、その闘争力、その逆境の鍛練」などにより長い間、妹とは「別個の容貌のごとき印象を」与えていた[註 65]というほどであるから、死に直面した木堂は、このときようやく政治から解放されたのであろう。

健は木堂の呼吸が「微弱」になると母親の千代の言うとおりに耳元で父の名をしっかりと呼びはじめた。すると岡山の従兄が「もつと大声でないと聞こえませんぜ」と言ったのを聞くと健は、まだ小説を書いていたときの感情で「どうせ聞こえないのだ。名を呼び続けるのは生きている者の慰めなのだ」と考えた。

いよいよ最後のときを察した健は遺族になろうとする者たちへの「慰安」のために「お父さん、後は安心して下さい」と声をかけると「河流の堰が破れたように一時に周囲から歎息が起こった」というが、このことを記す健は、まるで自分と木堂がやり取りをしているかのような書き方をしている。

ここで道子が呼ばれてくると「お祖父ちやま。お祖父ちやま」と声を限りに木堂の枕もとで泣きつづけたが、子供に寛大であった木堂なので健は、このような道子の叫びを受け入れるだろうと思い、道子の気が済むようにさせていた。またこの場に来れなかった健の妹の信が猩紅熱を患っているのを「不愍」に思った。そして、いよいよ来るべきときが訪れた[註 66]。

父の顔は甚だ柔和であつた。いかなる人、いかなる事をも恕してゐるようであつ

た。

「なあに、心配するな」と云ひさうであつた。

これが臨終と云ふものであると、私は認識した。私は父の臨終の光景がいつか分からぬ将来に来るものと漠然と考へてゐたが、今や不意に眼前に驀進して近づいたのである。而して数時間にして完了されたのである。この測定の狂ひに自ら驚いて、私は幾度か室内の隅々までを見渡した。

ほかのだれよりも父親にたいする想いが強くなつていた健は、死にいたる木堂と、言葉ではなく表情で会話をしたが、それで満足してゐたのではないようである。やはり生きてゐるうちに父子として道子のようにもっと木堂と心を通わせたかったのであろう。それゆゑ、木堂が道子を描いた詩を心から羨ましく感じた[註 67]。

私は今更のごとくに日々祖父の相手になつてゐた道子を羨んだ。内閣組織以来、殊に父と私との関係は上官と下僚の関係に等しかつた。私は政党内の微妙な宣伝や策動を顧慮して此二年間といふもの、務めて息子としてよりは一党员としての態度を持してゐた。私は父の前に出れば言葉短く報告し、質問を受けた時はあらん限りの誠意をもつて公平なりと信ずる観察を伝へ、父独特の簡單明瞭なる指示を受け、そして父に少しなりとも休息を与へん為になるべく速かに座を退いた。何といふ世俗の、下らぬ、せゝこましき顧慮であつたらう。私はその為に、人生を経験し尽した、博識な、話の面白い、温容に満ちた家父の味を十二分に楽しまずして過ぎたのである。

なんとも表現しがたい想いが伝わる文章である。これが健の本音であらう。木堂は歴史の進路を少しでも変更させようとしたが、実現できなかった。その意味では不満足だったかもしれないが、心の中では一種の幸福感はあつたものと推察される。というのは、幼少の頃に健の母を奪つてしまった行為によって木堂自身の心の中にある、健にたいするトラウマを最晩年に癒すことができたかもしれないからである。これは、健が作家活動を擲つて自分の秘書となつてくれたことと、道子を自分の思いのままに可愛がらせてくれたことから、そう考えたかもしれない。

その意味では、木堂にとって覚悟した上での死は、二重の意味で「幸福」だったかもしれない。一つは政治家として国家の政策を身を以て修正しようとしたが、このことに失敗したのちも壮年期から理想として尊敬してきた明治の元勳の1人である西郷隆盛の最期を彷彿とさせるように死ぬことができたからである[註 68]。これは、その場に直面しないと人は理想的に死ぬとは思えないが、少なくとも木堂はそうできた。しかも、堂々と死ぬことで政治史に名前を残す事が出来たのであるから。そのことを政治評論家の山浦貫一

が次のように述べているのは、正鶴を射ている[註 69]。

先生の凶死は悲しい。しかし、ものは考へやうである。先生は歴史の上にハッキリとその存在を示すやうな最期を遂げた。原敬にしても、井上準之助にしても、何れも無名の青年に殺されてゐる。先生は陸海軍の軍人九人に襲撃された。帝国の陸海軍々人が一国の宰相を殺すといふことは歴史にない。それだけ種々の意味で後世の史家は「犬養毅」を記憶印象するであらう。・・・政党主義を立前として、永眠したのである。

山浦の指摘は、政治史における木堂の死の意味を見事に表現している。

では、もう一つの「幸福」とは。それは、息子の健から深い愛情を引き出し、しかもこれから生きていく孫の道子がかもっと長い時間にわたって自分の存在を鮮やかに記憶に残してくれるであろうからである。そして、その通り道子は、木堂の生きてきた証を表現し、このことをさらに歴史に記してくれることになった。道子は健が放擲した作家としての才能を受け継ぎ、それによって木堂を『花々と星々と』という著書で人々の記憶に蘇らせることができたからである。

以上のことを考えると、木堂は「幸福」な死を迎えることができたのではあるまいか、と考えるのは筆者だけであろうか。

おわりに

木堂が事件の前後に述べたという「話せばわかる」とか「あの若い連中を連れてこい。話して聞かせてやる」という言葉について、犬養道子は後年その意味を明らかにしようとして、のちに刊行した著書[註 70]で、検討している[註 71]。

幼いながらも木堂をよく知っていた道子は、あのような暗殺者の前で聞かれもしないのに「話せば分かる」などと木堂は言ったのではなく、何か聞かれたから返答をし、説明しようとした時に撃たれたためお手伝いの女性に「いまの若いモンを呼んで来い」と述べた言葉の方を、近くにいたお手伝いと道子の母親が聞いたと証言している。つまり、道子の考えでは、「話せばわかる」というようなことであれば、あのような事件は起こることもなく、そうでなかったからこそ当時は「話してわからぬ時代」であったというのである。

そこで、道子は、その時のことをふれた関係者の証言や父親の健のメモに頼りつつ、次のようなことを推測している。まことに興味深い内容であるため、このことを紹介しつつ「おわりに」したい。道子が注目したのは、事件後に西園寺公望の秘書の原田熊雄が述べた証言である。原田は、一応「噂」だと断ったうえで、次のように証言している[註 72]。

・・・張学良の倉庫の中から日本の政党の領袖や大官の署名ある金円の領収書が現

はれた中に犬養総理のものも混つてゐたとかで、こんなことがかねて彼等を憤激させた原因ともなつてゐたらしい。先頭第一に侵入して来た青年士官が総理を拳銃で脅しながら、張学良から金をもらつた一件を難詰しようとした時に、総理はこれに対して、「その話なら話せば判るからこつちに来い」と言つて日本間に椅子、テーブルを置いた応接間に連れて行かうとした。その時に、裏から廻つた一隊が現はれて発砲を促し凶行を遂げさせた

道子は、この証言の真実を明らかにするために、今度は父親・健が書いた次のような遺稿メモを使って説明しようとしている[註73]。

……犬養内閣成立（一九三一年十二月中旬）後まもなく、暮もおしつまつたころ。父は、一通の密書を受け取った。差出人は、抗日の先鋒、張学良であつた。『閣下の中国理解の深さに信を置き、ここに私信を送つて、敢てお願いしたきことあり』とその密書ははじまつていた。西洋風の純白の紙に緑で『張』の一文字を浮き上らせた書簡箋であつた。

私信は、私有財産に関するもので、満洲で日本軍に抑えられてしまった財産一切——亡父張作霖遺品を含む——が何とか手元に返えるよう御尽力願えまいか。財産私財と申すが、書物である、古美術である、書である、拓本である……

父木堂は、関東軍の掠奪を悲しみ、中国人の財産すべては——ことにも貴重な、民族的文化遺産である書物拓本の類は——直ちに中国のものとして返されるべきであると考えた。同時に、愛する孫娘から少々厄介な頼みごとをされたときのような顔もして見せた。

厄介とは、果してこの時期——すなわち関東軍天下のいま、この自分——すなわち関東軍ににらまれる自分に、この頼みごとを叶えてやれる力があるかわからぬと言う意味であつた。

愛する孫の頼みのように……そう、父は、張に信を置かれて嬉しかったのである……

このことから道子は、犬養が張学良から金品を受け取つたというのは、「資材搜索・返却輸送に必要と思われる」金と小切手だったのでないかと推測している。

つづけて健のメモは、こう記してあつたという[註74]。

張学良の願いを叶えることは、ただちに、ほんのわずかなりとも、大陸での対日感情を変えることに役立つかもしれぬ。満州をカッさらい、もろもろの私財をかすめ奪つてゆくだけの日本人でもないことを、『おお、よかつた、返つて来たぞ、日

本が返してくれたぞ』と喜ぶ將軍を眺め見た配下の兵たちの、口から口に伝えられてひろまってゆくかもしれぬと思って・・・

この健のメモを筆者は未見であるため断定しがたいが、もしこれが事実であれば、極めて意味深いことである。道子は、もしかすると張学良の書簡を健が、木堂が暗殺されたのちに妻の千代が別所帯になる時に持たせたのではないかとも推測しているが、そうであるとすると今日どこかに残っているのかもしれない、将来見つかる可能性がある。しかし、現在では何とも言えない。

しかしながら、道子が木堂との交流について執筆した著書は、自分の記憶を正確に辿りつつ、父親の健や母親の仲子らからも聞き取っているため、歴史の証言としては信頼性が高い内容である。そのことから、判断すると、このような父親との会話もそうであろうと容易に推測できるため、おそらく張学良からの書簡も事実であったものと思われる。とすれば、首相官邸を襲撃したメンバーがそのことを詰問したのにたいして、木堂がそのように述べたと考えることができる。

犬養が正式の外交ルートを迂回して事変の解決をしようとしていたことはよく知られているが、この張学良からの要請に応えようとしていたこともこのような具体例の一つであろう。しかしながら、このようなことが実際の外交の中で何らかの効果をもった例はあまりない。いかに犬養が、中国要人と個人的ルートをもち、それなりの影響力をもった場合があったとしても、個人として行動してそれなりの成果を挙げるとは思われぬ。しかしながら晩年の犬養は、このようなことが実現できると考えていたのである。

人の記憶は、曖昧な部分もあるが、それがあつた文章やメモによって鮮やかに蘇り、それをめぐる人物の周辺を見事に描ききることがある。その具体例の一つが道子が描く最後の木堂である。このような動きのなかにこそ犬養の真骨頂があつたが、そのことが犬養の死を早めた一因となつたとすれば、何とも深い歴史の重みを感じざるを得ない。

・本論文のテーマと同様のテーマから木堂と家族に関して執筆された記事として、保坂正康『妻と家族のみが知る宰相』〔毎日新聞、2010年、9-66頁〕があるが、筆者は「孫の道子から見た木堂」という視点であるため、内容は異にしている。

・本論文(Ⅰ)と(Ⅱ)の引用文中のルビは、原文のままであり、引用文中の〔 〕は筆者が付した。

註

42) 犬養道子『花々と星々と』(中央公論社、1974年)265-268頁。

43) 同上書、290-291頁。

44) これは、現在、岡山県庭瀬の岡山県郷土文化財団の「犬養木堂記念館」に展示されている。

45) 犬養道子、前掲書『花々と星々と』292頁。

46) 同上書、290-293頁。

47) 同上書、270頁。

- 48) 同上書, 同頁.
- 49) 同上書, 284 頁.
- 50) 犬養健「山本条太郎と犬養毅・森格」(『新文明』1960年7月).
- 51) 犬養道子, 前掲書『花々と星々と』287頁.
- 52) 同上書, 288頁.
- 53) 伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制の崩壊』(名古屋大学出版会, 2005年)345-346頁.
- 54) 犬養道子, 前掲書『花々と星々と』303頁.
- 55) 同上書, 308頁.
- 56) 芳沢謙吉については, 緒方貞子「芳沢謙吉」(外務省外交史料館・日本外交史辞典編集委員会編『新版日本外交史辞典』山川出版社, 1992年)1027-1028頁参照.
- 57) 犬養道子, 前掲書『花々と星々と』312頁.
- 58) 同上書, 315頁.
- 59) 同上書, 316-317頁.
- 60) 犬養康彦「五・一五事件と私」(岡山県郷土文化財団犬養木堂記念館, 2003年)617頁. この時のことを黒岩少尉は, 「・・・年合三十歳前後と見える女中を先頭に其の後ろに子供を抱いた女が続いて来るのを認め」たのちに, 「私は首相が殺されるのを女や子供に見せたくないと考へましたので数歩引退して其の千頭的女に君等は別に危害を加へぬから彼方に行つて貰ひ度いと申しましたところ其の女が後ろを振り返つて子供を指しながら此の子供とか何とか云つて居りましたから私が子供が怎うしたのかと問返しましたが今度は何とも答へませぬでしたので其の儘私は他の同志の後を追つて廊下の右側の日本間に入りました」と証言している(証人・黒岩勇「第五回証人訊問調査」高橋正衛解説『現代史資料 5 国家主義運動 2』みすず書房, 1964年, 677-678頁).
- 61) 犬養健「犬養木堂を憶ふ・追憶」(『中央公論』1932年7月)208頁.
- 62) 犬養健「南洲翁を手本に心に期してゐた」(『東京朝日新聞』昭和7年5月19日付).
- 63) 犬養健, 前掲「犬養木堂を憶ふ・追憶」210頁. 犬養の「死体検案書」によると, 死亡の原因は「銃創二起因スル頭蓋腔内血管ノ損傷ニヨリテ惹起セラレタル脳圧ニヨル心臓及呼吸麻痺ニヨ」とし, 傷を受けたのが5月15日の午後5時30分頃で, 死亡時間は翌日午前2時35分頃とされている(原秀男, 澤地久枝, 匂坂哲郎編『檢察秘録 五・一五事件 I (匂坂資料 I)』角川書店, 1989年, 336頁). しかし, この死亡時間については間違っており, 健が証言している午後11時26分の方が正確である.
- 64) 犬養健「追憶(承前)」(『中央公論』1932年8月)149頁.
- 65) 同上, 150頁.
- 66) 同上, 151頁.
- 67) 同上, 152-153頁.
- 68) 健は, 犬養が西郷隆盛を尊敬しており, その西郷が西南戦争で最後の時に城山で弾丸が当たると「宛も食事時に茶づけ飯でもあつらえるように『おい, 介添を頼む』と声をかけて首を切って貰ったそうである」ということにつづけて, 「息子の欲目か知らぬが, 父の死の方には南洲公〔西郷〕の死に方の感化があるように思われる」と証言している(犬養健「犬養毅」同著者他編『父の映像』筑摩書房, 1988年, 9頁).
- 69) 山水甫(山浦貫一)「犬養先生を憶ふ」『新愛知』1932年5月16日号外(『犬養木堂伝』716頁所収).
- 70) 犬養道子『ある歴史の娘』(中央公論新社, 2004年).
- 71) 日本近代史に関する歴史評論家の保坂正康が, 近著(『妻と家族のみが知る宰相』毎日新聞, 2010年, 28-32頁)のなかでそのことを取り上げている. なお, 健自身は, 犬養のこの時の言葉を「話をすればわかる, ワシが話してきかすからこつちへ来い, 話を聞いてもわからんけりやそん時に撃て」と証言している(犬養健, 前掲「南洲翁を手本に心に期してゐた」).
- 72) 原田熊雄『西園寺公と政局』第2巻(岩波書店, 1950年)286-289頁.

- 73) 犬養道子, 前掲書『ある歴史の娘』, 153-154 頁.
- 74) 同上書, 156 頁.

※本論文で掲載した写真は、「犬養木堂記念館」所蔵である。また、同記念館の石川由希氏からいろいろご教示をいただいた。末尾ながら心から感謝申し上げたい。

The image of Tsuyoshi INUKAI in his later years from the perspective of his family - based on the testimony of his grand-daughter, Michiko INUKAI (II)

Hideto TOKITOH

*College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2014)

In 1929, INUKAI, who had been only the head of minor political parties, finally became the president of a major party – Seiyukai, and he was ready to make his ideals real, his granddaughter was 8 years old, and was able to sense that her grandfather – ‘*Bokudo*’ - had become quite a big figure in the politics. She began to understand that those who visited their residence were also renowned people, but his grandfather remained as nice as ever to Michiko, and prioritized her as always.

In 1931, Kanto Army ignited Manchurian Incident, and in December of the same year when the nation started to become noisy, INUKAI rose to the top of Japan as the Prime Minister. Michiko started to recognize the significance of that. She further understood its magnitude when her grandfather divided his legacy and started to talk about death to her after he became the Prime Minister. He also handed to his granddaughter a note about his experiences in his life as a ‘lecture’ with the word of ‘恕’ (compassion) that he wrote for Michiko before his accession as the Prime Minister. This tells it all about INUKAI’s life.

And then, suddenly, INUKAI’s death struck Michiko, and the death of her beloved grandfather – *Bokudo* – left a scar in her mind. After she learned that her grandfather had been shot, and many things came to her mind to please her or to sadden her as she visited him at the hospital in his death bed. When his death finally arrived on him, she was trying to see his soul rise up to the heaven, and in her such responses, everything about his granddaughter INUKAI loved so dearly was revealed.

In the ‘Afterword’, I discussed INUKAI’s last word that was directed to the young naval officers who trespassed into his office: whether he said ‘If I could speak, you would understand’ or ‘I would tell you to make you understand’ that became historical word.